

## 市長就任に当たっての記者会見（H24.9.10）の記録

（市長）

今日から岩見沢市長として初登庁した松野でございます。7月25日に退職をして以来、今日で47日目だと思います。先ほど、訓示ということでは市の職員に、私の基本的な考え方を分かりやすくご説明したつもりでございます。市役所を改革する、それが何よりもこれからの岩見沢市政にとって必要なことなんだと、失われた信頼を取り戻す努力を職員と一緒に汗を流してやっていくんだと、ぜひ認識を変えてもらいたく、特に管理職には、立場をわきまえた上で仕事をしてもらいたい、ということでお話をさせていただきました。私の抱負は、これから当面の課題だけでも山積しておりますが、そういった課題に対してしっかりとした市政を運営していくためにも、やはり市役所を改革する、そのことに尽きるんだという思いでございます。それは選挙戦、退職をしてから選挙戦を通じまして、より強くなった私の決意でございますので、どうぞ皆様、よろしく願いをいたします。

（読売）

市役所改革を一番最初に掲げましたが、具体的に何をしようとお考えなのか。

（市長）

まず、一番最初は、職員に意識改革をしてもらいたい。仕事をするのは人間ですから、市の職員が仕事をする上で、どう意識を変えてもらうのか、変える必要があるということをごきちん認識してもらいたい、ということだと思います。いくら組織を作っても、やはり職員がしっかりしていなければ、また同じ結果になりますから、そういったことが起きないように、へんなセクト主義とか、縦割り主義とか、そういったことを組織のせいにするような、そんな状態にはしたくない、と考えています。

具体的に少し言えば、私は、当面する除排雪の体制をどうするのか、これはもう喫緊の課題だと思っています。ごみ処分の問題、それから学校給食共同調理所の問題、これはやはり、例えば共同調理所であれば、教育委員会だけに任せるのではなくて、市長部局としてもきちんとした対応をとっていき、そのための人為的かもしれないけれどもそういう調整もあり、また、そういう構成に一部変えていこうかと思っています。具体的には人事担当のレクチャーを聞いた上で考えていますが、必要な指示を出していこうと思っています。

（道新）

選挙戦を振り返って、既成政党の支援とか、あまり組織のない中で、当選できた理由というのはどの辺にあると思いますか。

（市長）

私の考えに共感していただいて、勝手連、そういう活動をしていただいた方々が大変たくさんいたということに尽きるのだと思います。結果として今回の選挙を見ますと、むしろ政党ですとか、団体ですとか、そういった方々の支援を受けなかった私が、当選させていただいた、という結果にもなっています。むしろ、しがらみを抱えたことのない選挙戦の戦い方に尽きると思います。

(道新)

市民には松野さんのどの部分が一番共感してもらえたと思いますか。

(市長)

やはり近年起きたごみ処分場の問題、学校給食による食中毒の問題、それから今年の冬の大雪の対応の問題、これはやはり市役所に対する信頼を大きく損ねています。これはむしろ市の職員として感じていた以上に、失ったものは少なくありません。失った信頼は決して小さくない、と感じました。先ほど、市長訓示でも申し上げましたように、信頼は失うのは一瞬ですけれども、回復するのは、時間もかかりますし、苦労も重ねることになるかもしれません。やはり一つ一つの積み重ね、これを実践していくしかない、と改めて私自身認識しています。

(道新)

選挙期間中、5年先、10年先を見据えたまちづくりというお話もあって、市役所改革を強調されていたんですけども、市役所改革のその先が、ちょっと見えづらい。5年先、10年先、松野さんにお任せして、どういうまちになるのかという青写真が全く思い浮かばないんですけども、どうのように導いていくんでしょうか。どうのように岩見沢市が発展していくのか、道筋をつけるのかというのはどうでしょうか。

(市長)

私自身は、岩見沢市を活気づけたいということを申し上げています。市役所をしっかりとしたところにするということを前提として、住民の方に安心感と満足感を得ていただけるようなまちづくり、それは大きくは雇用を含めた経済の問題、それから子育て等、高齢者の福祉も含めての福祉全体の問題だったと考えています。私はあるアンケートに答えて、5年後は、「日本一元気な市役所がある岩見沢」、10年後は、「本当に住んでいてよかったと思える岩見沢のまち」というイメージをお伝えしています。これは何よりも、例えてあげれば雪の問題かもしれませんが、岩見沢は確かに豪雪です。特別豪雪地帯に指定され、確かに冬は雪が大変だけれども、市役所が頑張って自分たちの安全と安心を確保してくれる。市役所が一生懸命、汗を流してやってくれている、そういう信頼関係を築きたい。

そういう信頼関係を基にして、今、国会の情勢も含めて非常に不透明です。世の先行きも厳しい数字が出されています。それに対する具体的な手立てを、やはり市の全体の中で政策的に立案していかなければならないと考えています。目先のことだけにとらわれて、これをどうする、こうするっていうことについては、現状では、私は、あえて言わなかった、というところが正直なところ。イメージとしては、岩見沢は地の利があると申し上げました。岩見沢に住んでいるからこその利便性を感じてもらえるような、そんな安心して暮らしていただけるサービスの提供ができる、全体として満足していただけることが、福祉だけの問題ではなくて、雇用問題も含めてトータルなイメージになったと思います。

(朝日)

とりあえず着任されて、早急に取り組みたいということはございますか。

(市長)

やはり除排雪が一番心配です。体制づくりでは、これは関係する機関や団体との信頼関係の構築も含めてということになると思っておりますが、詳しくは各部から責任あるレクチャーを受けた上で、きちんとまとめあげたいと思っております。

(毎日)

副市長が今 1 人ですが、補充するのか、それとも 1 人のままいくのか。その辺、まだ決まっていないのですか。

(市長)

未定です。当面、このまま 1 人体制で行こうと思っておりますが、もう 1 人空いている副市長には、どういった方がいいのか、内部からの登用なのか、外部からなのか、そういったことも含めて、それは、きちんと考えていきたいと思っております。

(NHK)

今回の選挙で 12,000 票を超える得票を得たわけなんですけども、この得票というのは、多いとか少ないとか、市民の皆さんの期待だとは思いますが、どうふうに受け止めていますか。

(市長)

私自身としては、市役所の改革ということを一に訴えさせていただきましたけども、先ほども申し上げたように、市役所が失った信頼というのは決して小さくはありません。また、その半面、市役所に期待するという皆さんのお声だと思っております。それを私が若さということもあるのかもしれないけども、私の可能性も含めてご支持いただいたと考えています。

(道新)

1 か月ぶりに市役所にお戻りになって、1 か月前と今日とでは気持ちの変化がありましたらいかがですか。

(市長)

自分自身、今日 47 日ぶりに初登庁させていただきました。その後すぐ、実は 31 年間、働いた場所ですから、1 人で庁内をぐるぐる回っておりました。その中で職員の顔を見て、反応を見て、責任の重さを感じるとともに、職員と一緒にやっていきたいという熱意をしっかりと感じ取ることができました。初登庁というセレモニーなんでしょうけども、仕事の合間にあんなに多くの職員が、自分を出迎えてくれたということは、いささか驚いたことでもありますし、それだけ職員の熱意ということも直接感じることもできました。そういった意味では、本当に身の引き締まる思いです。

(プレス空知)

先ほど来、市役所改革というところで、職員の意識を変えていきたいということで、手をつけたいということだったんですけども、例えば意識を変えるというのは、

具体的にどんなところから、どういう手法でやっていきたいと考えていますか。

(市長)

やはりそれは仕事を通してが、基本になると思います。仕事の中身とか、仕事のやり方を通して変えていく、それが基本になると思います。それとやはり、管理職たるものの自覚の問題も大きいかなと思います。特に若手の職員には、自由な発想で、市役所をよくしたいと思っている職員もたくさんいますので、そういった意味では、私は職員提案制度、提案レポート、かつてやっておりましたものですが、人事の評価にも使えて、そういう積極的な提案っていうのは組織としての一つの活力を生むと考えています。それから組織だけいじって職員が変わらなければ、結果として何も変わりません。それは職員の自覚の問題も含めて、仕事のやり方を通して、地道になるのかも知れませんが、また、私一人でできるわけではないですから、一人でも優秀な職員を増やしていく、ということが、全体のレベルアップにもつながると思います。

(道新)

職員提案レポートというのは、政策提案ですか。

(市長)

内容は自由だと思います。以前やっていたのは、係長に昇任する前の職員、課長職に昇任する前の職員を対象として、職場の改善策、それからそういったことも含めて内容は自由で、そういう提案レポートをやっていました。そういった自由な発想を、やる気を導き出すようなものについては、むしろ復活させた方がいいと思います。

(道新)

それは前の渡辺市政になってから無くなったのですか。

(市長)

そうですね。

(プレス空知)

今年に入って行政課題研究をやっていると思うんですけど、当初10月くらいにまとまってくるというような話でしたが、どのように対応されますか。

(市長)

その中できちんと評価をした上で、取り入れていきたいと考えています。若い職員が、ばらつきが確かにあるんですけども、若い職員を中心として一生懸命取り組んできたっていうのは、私も承知しています。ただ具体的な内容はまだ全然承知していませんけども、すぐにでも取り入れるものがあれば、柔軟に取り入れていきたいと思っています。それはあくまでもプロジェクトチームということで、どちらかという当面の課題解決のような側面もないわけじゃないですけども、そのことだけにとらわれないで職員個々の提案というものも、あってしかるべきだなと思います。

(H T B)

市の改革とは、職員の意識改革が必要だとおっしゃっているんですけども、正職員の方の働きぶりに、31年働いてこられて不満に思う点が多々あったんでしょうか。

(市長)

ありました。当時、市の職員でしたけども、どこを向いて仕事をしているのか分からないような感想を持ったのは事実です。市民のために仕事をしているのか、上司のために仕事をしているのか、それがやはり組織としての活力を大きく損ねたと私は思っています。

(H T B)

どちらかという若い自由な発想を持った人間の意思を汲み取らない管理職にも問題があるのではないかと。

(市長)

いろんな問題はあるかと思えます。問題は一つあってこうなったということではなくて、構造的な問題もあると思えます。管理職の仕事に対する考え方の認識の問題と、若い職員自身も、アイデアを考えない、若しくは出さない、そういう風通しの悪さは、横同士の中も上下の中でもあり、縦横それぞれありました。権限には責任が伴うので、そういった点をきちんと認識してもらいたいと思います。部長だからといって物事をすべて決められるわけでもないでしょう。

(道新)

非常に厳しい認識をお持ちだというのが、伝わるんですけども、いろいろ、ごみですとか、あるいは給食ですとか、これまで機能不全のような認識を市役所としてお持ちなのでしょうか。

(市長)

少なくとも対応としてスピード感に欠けていたり、不信感を増長させる、そういう対応であったということをおはむしろ考えています。市民参加というのは当然の話なので、むしろ今はそういうサービスを行政だけに頼らないでどう多様な主体を使ってサービスのレベルを上げていくのと同じように、市民の方々のただ要求を聞けばいいという話じゃないですけども、きちんと受け止めて、きちんと回答を出していく。出来るものはできる、出来ないものはできない。やれることはやれて、やることによって、こういう弊害があるとか、そういうことは行政のプロとして、きちんとした判断基準を持って、それをお示ししながら、政策決定をしてこななければいけないのではないのでしょうか。ただ単に審議会を作って市民の方々の公募で、いろんな方に集まっていただいて、それで一定の結論に導いていくような、それは市民自治とは言わない、市民参加とは言いません。ただ、それをするためには職員の能力を飛躍的に向上させなければならないのです。

今、こういう時代なので、専門分野に特化した職員を作る必要があると思っています。例えば福祉分野ですとか、これだけ制度が複雑化して、なおかつ制度改正が繁雑に起こるようなことにきちんと対応できる人物には、ある程度専門職として養

成していく必要があると思います。それを踏まえながらもやはり市役所全体に目配りができるような職員もきちんと養成していくべきだと思います。専門分野としての意見だけにとらわれなくて、全体を見通して自由な発想で物事を組み合わせることができ、そういった職員もやはり必要かなと思っています。

(HBC)

今の市役所の改革というお話が出ましたが、具体的に部局の変更とか、人事の考え方とか、時期も含めてお考えがあれば教えてください。

(市長)

人事の件は、やはり適材適所につけると思うので、これはきちんとしたい。組織の変更については、もう一度、現状を一回、自分なりに整理をしてみたいと思っています。時期的な問題については、できれば早くやりたいという気持ちはありますが、拙速すぎて、後々困るような事態も避けたいと思っているのも事実でございます。できるだけきちんとした形で市民の方にもご説明できるような、そういう組織体制を構築したいと思っています。それについては、部の統合もあるかもしれませんし、いろんなセクションの見直しも当然含まれてくると思っています。

(HBC)

具体的にはこれから検討するということですね。

(市長)

具体的にこれから、イメージが実はないわけではないのですけども。まだそれは担当セクションの話を聞いた上でお示ししたいと思っています。

(道新)

市長の情報発信のあり方ですが、前市長のときは原則、月1回、定例記者会見を開くという話になっていたのですけれども、発表する話題がなければ開かないと言って、結局不定期の状況だったのです。今、ご自身としては、どういうお考えをお持ちですか。

(市長)

私自身は、定例記者会見という形がいいのか、そのやり方とか、あり方とかは、いろいろご相談をしてということになるかとは思いますが、やはり月に1度、意見交換といいますか、記者の方々ときちんとお話をする機会というのは、当然持つべきだと思います。それはむしろ必要があれば、その都度ということもあるのですが、少なくとも月に1回やると言ったものを、案件がなければしない、というようなことを私はするつもりはありません。案件がなくても、いろいろとお話をすることは重要なことだと思っています。